

# 文芸特集



たくさん作品の中から選ばれた秀作の一部を紹介します。限られた字数の中に織り込まれた、さまざまに思いや季節の情緒を味わってみてください。

## 一席

杖放し試歩する妻の先を行き段差確かめ立ち止まり待つ

安行原 山田 英一

評 試歩とは試みに歩くこと。特に長期の療養者が、足ならしに歩くことをいう。作者が妻を気遣っている様子に心打たれる。それが「段差確かめ立ち止まり待つ」に具体的な行為として詠まれている。

蓬の香身に染まるほど手伝えばたんとおあがり伯母の草もち

幸町1 保坂 治代

ふみの日に手紙やりとり楽しいなスマホにはないあじわ、嬉し

鳩ヶ谷本町4 佐羽みはる

水仙を手向けて今日の無事祈り子らを思い明かりを灯す

赤井1 栗原 正栄

備忘録この言の葉の温もりに一冊いたたく高齢者窓口

上青木3 岩崎モト子

摘み草を天ぶらにしたラインでの便りに青き香も漂い来

芝富士1 小野 隆子

ほほ笑みの観音像に蠟梅の黄の花満ちてあたり明るし

三ツ和1 山口 元幸

ほつりと背中ぬくめる梅日和このままずっと歩いていたい

芝高木2 森田富美子

庭先に沈丁花の香り漂いて妻のハサミで散髪をする

安行原 高橋 清

忘れまじあまたの人の眠る海三陸の波藍にしずもる

差間 中田 道子

宙に舞うほんの一時初雪は南天の葉少し白くす

坂下町3 川名 佳子

町会の草取り皆老人で安否気づかう朝のひとつとき

芝下2 中山千枝子

夫君はパーキンソン病寄りそいで白南天のつえのぎんぐくに

北園町 松本 京子

花火の夜花火見るより君の顔じつと見つめた初恋の人

鳩ヶ谷本町2 市川 和夫

幼き日手を引き育てし孫つちに今は手引かれ病院通ひ

東川口3 田吹 邦枝

雪山に遭難の友山頂にとぶらふ石をひとつ重ねり

川口1 川久保良治

小枝ゆらしさえずり小鳥とびてゆくあの橋を渡りわたしも行くか

道合 神谷安久子

金婚に妻と歌えばカラオケのリズムがそむく記念の日でも

領家3 森岡 賢吉

## 俳句

### 山崎 十生 選

## 一席

ぬれるのがだいすきだからあめがすき 南鳩ヶ谷3 飯村 智穂

評 作者は4歳児。季語の知識もない。大人なら「春の雨」と丸く収めようと守りの姿勢になりがちである。俳句は常に攻めの姿勢を貫く詩である。掲句のおおらがで自由な発想は、子どもにとつて大切なことである。翔べよ俳人。

読み返す「銀河鉄道」おぼろ月

安行吉岡 會澤 光子

雪の道上履のまま走りけり

安行領根岸 石井トシ子

初雪に空を見上げて目を閉じて

南町2 浦部千恵子

猫の子よその肉球には負ける

上青木西2 大滝 徳美

白蓮の花びら踏みて子ら駈ける

戸塚東1 久須美節子

新緑を襖としたる古墳群

上青木1 鈴木 千鶴

眠そうに肩寄せあつて春の山

本町4 田邊 元子

春霞四方を見わたす膝枕

西川口4 中島由美子

草原に小さい春がかくれんぼ

里 中村ノブ子

ひとり言聞かれ舌出す蛭かな

新堀 浜田 輝子

風に触れ葉裏をすべるかたつむり

小谷場 宗像とき子

掌のくぼみに掬ふ春の水

南鳩ヶ谷5 村田 和枝

見覚えのある体形や春日傘

源左衛門新田 佐藤 都

赤井4 倉川 和子

### 新井 愁思 選

## 一席

聴き役に徹し雑学積んでいく

飯塚2 川瀬 伊津子

評 謙虚な寡黙派をモットーとした作者の理念。周囲から得る雑学に己を磨いているのだ。触媒による自己の昇進にもどかしさはあるが、焦らず信じた道を往くのみだ。

真つ当に歩む晩節汚さない

鳩ヶ谷本町3 加藤 レイ

更新のたびに老けてる免許証

東川口2 星野 直康

慢心の男尖らす喉仏

上青木西4 星野 良一

食文化信じられぬが災を呼び

元郷2 田口 公江

二世帯を取りつぐ孫という宝

安行領根岸 宮崎 忠久

介護五の自分に思う字が書けず

安行領家 原沢かね子

晴天に何より感謝歩く道

上青木4 星野 明美

戸塚境町 稲垣 洋

## 川柳

### 新井 愁思 選

聴き役に徹し雑学積んでいく

評 謙虚な寡黙派をモットーとした作者の理念。周囲から得る雑学に己を磨いているのだ。触媒による自己の昇進にもどかしさはあるが、焦らず信じた道を往くのみだ。

真つ当に歩む晩節汚さない

鳩ヶ谷本町3 加藤 レイ

更新のたびに老けてる免許証

東川口2 星野 直康

慢心の男尖らす喉仏

上青木西4 星野 良一

食文化信じられぬが災を呼び

元郷2 田口 公江

二世帯を取りつぐ孫という宝

安行領根岸 宮崎 忠久

介護五の自分に思う字が書けず

安行領家 原沢かね子

晴天に何より感謝歩く道

上青木4 星野 明美

戸塚境町 稲垣 洋